

臘梅



鹿兒島に住むようになつて、六度目の正月を迎えた。昨秋姑が亡くなつたので喪中である。祝いの行事などは行わないし、子供たちも帰郷しなかつたので、夫と二人のしめやかな正月であつた。表玄関からの出入りも殆どなく、私も裏庭だけで日常のことは済ませていた。

今年の冬は例年になく暖かで穏やかな日が続いている。ある日、表の庭に回つてふくらみ初めた椿の蕾を確かめたり、暮れに植えた屋久石楠花の様子を見ていた。そして昔の木戸のあとに植えた臘梅がほころび初めているのに気づいた。

この臘梅には五度目の正月である。花蘇芳杏、カリン、山菜萵、花水木、石楠花、岩つつじ、枝垂れ桃と、椿や山茶花、ツツジの類以外の殆どの花咲く樹木はその同じ年に植えた。家を建て替え、新たな造園をした翌年である。それは夫がまだ東京に勤めていて、姑と二人の生活を送つていた時であつた。

翌年は全ての木が沢山の花を着けた。臘梅にはまさに鈴なりという形容がぴったり可愛い薄黄色の花がつつむいて枝に並んで、近づくと甘い芳香がただよつていた。私は毎朝寒さに耐えて咲く可憐なその花の側に佇んで眺めた。

それが翌年からはパツタリと花を着けなくなつた。臘梅はかりではない。十字のカツキリとした白い花を一杯に着けていた花水木も濃い桜色の杏も全て咲かない。私は、一年目は移植されるまでに蓄えた養分で咲いたものの、まだ根が十分新しい地から養分を吸収するまでにはなつていないからだとおつて格別がっかりもしなかつた。しかしやはり物足りない思いはあつて、次の春になるのを心待ちする年が続いた。

どうやら今年はこの樹木も花の着きはよさそうである。臘梅も以前の鈴なりとはいかないもののちらほら咲いている。馥郁とまでは言えないが、頬を近寄せるとかすかに甘い香りがする。私は

「やつとわが家の木になつたのね」
と声を掛けた。

臘梅には一寸した思い出がある。私の育つた信州は寒い山国で、冬咲く花の樹木など全くない。臘梅などは見たこともなかった。それが遠いスペインで初めて出会ったのだ。

冬のヨーロッパツアーは格安である。一月七日発というスペイン旅行に一人で参加したのは十五年ほど前のことであった。ロンドン経由で、マドリッドに二泊してアビラ、セゴビア、トレドなど巡つて後夜行でグラナダに向かった。空がうつすらと白み初めた頃グラナダ到着。駅近くのホテルで朝食を済ませた後、夢にまで見たアルハンブラ宮殿の見学である。

ホテルの前に勢ぞろいした一行の前にガイドのスペイン人の大男が立つて、自らを「カワサキさん」と名乗った。六十才を越えた年頃だろうか。学者のような感じであったが、着ていた薄茶色のジャンパーは大分くたびれていた。多少のアクセントのおかしさはあったものの丁寧な日本語で説明してくれる。カウヴした坂道を登って城門前に出た。そこにはすでに他の団体が列をなしていて、私たちもその後

に並んで入門を待った。磊落そうに喋っていたカワサキさんは、ふと傍らの肩ほどの葉のない灌木の枝先を折った。

「これはローバイです」

と言って私たちに小枝を見せると、しばらく無言になってそれに鼻を近づけた。無意識にふと見せた彼の表情には深い翳りがあった。日本に一度来たことがあるという日本語に堪能なカワサキさんは、スペインでは相当なインテリの部類の人である。それが旅人相手のガイドをしているのには、やはり何かしら事情があるに違いないと私は思った。

「臘梅」の語は彼の表情とともに私の記憶に残った。私は欲しい木のなかに臘梅を入れて、気のいい植木屋さんに注文した。彼は何処から仕入れて来たのか私の背丈ほどの、根元から三本に枝分かれしているこんもりした臘梅を運んでくれた。根元に万両のおまけまで付けて。

今年こそは全ての木々に気をつけて、肥料もやろうと思いつつ、日当たりのよい姑の部屋から庭を眺めているところである。